三好達治の詩と俳句

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛高, 隆夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1442

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

三好達治の詩と俳句

飛高隆夫

一

三好達治には、自らの詩歌の出発について述べた文章がいくつかあるが、ここでは、「詩歌の思出」(「短歌研究」昭和14・5)を取り上げてみたい。

三好達治は、その文章の中で、まず、「小学校の卒業前に、文学好きの若い先生に受け持つて貰つたので、その頃樗牛や独歩や漱石、さういふ文学者の名前を初めて覚えた。「滝口入道」や「武蔵野」や「猫」を読んだのもその頃である。」と文学の世界に初めて触れた思い出を述べている。「しかし当時は、新体詩といふものの存在さへも私はまだ知らなかつた。」と断っているのは、三好が、最終的には、詩の創作に生涯の道を見いだすことになったからに他ならない。

三好達治は、次に、同級生の「出来のいいおませな少年」が、俳句を作り、学校の新聞に掲げられていた思い出を述べている。それは「身のすゑを錦につつむ蚕かな」という句であるが、「たいへんうまいものだと感心したのを今に忘れない。」といい、「私がそもそも詩歌といふものに初めて感心したのは、さういふものを自ら制作する人物を身辺に見出して驚いたのは、それが最初の機会であつた。」と述べている。「身のすゑ」の句は、いわゆる月並み俳句の典型的なものであるが、それはそれとして、ここで、三好は、詩歌というものが、自分にとって、ただ読むばかりのものではなく、制作し

うるものであることを、無意識のうちにも、感得したにちがいない。そして、三好は、「中学へ上るやうになつた頃」、近所のやはり俳句を作る商家の若い主人と知り、「見よう見まねで彼のまねごと」をするようになった、というのである。ただ、その人物が得意としていたのは、「真面目な俳句よりも寧ろ川柳」であったので、三好が始めたのも、「さういふ川柳のまねごと」であった。三好は、そのことについて、「当時私はまた浪六ものの所謂撥鬢小説を愛読してゐたので、駄洒落や諧謔は少年なりに理解もし愛好もして、ひいてはさういふつまらぬまねごとも始めたのである。」と、いくぶん言い訳がましく付け加えているが、「駄洒落」は別としても「諧謔」は、三好の本性にそなわったものであり、のちのち、三好の詩の一特色を示すものともなるのである。

いずれにしろ、三好は、「内証でこつそり試みた」その「まねごと」が、その後継続し、「今日まづい詩歌の類を、なほこりず今に作りつづけてゐるのも、その頃のその出発の引続きであるといつていへないこともなささうである。」と、自らの詩歌の道の出発点を、この「まねごと」に見定めているのである。

なお、三好は、家庭の事情から一年遅れて入学した大阪府立市岡中学校を二年で中退し、大阪陸軍地方幼年学校、東京陸軍中央幼年学校本科、陸軍士官学校と軍人への道を辿り、その中途で挫折することになるのであるが、陸軍の学校に在学中も、「まつたく内証で秘密に」「その文芸を続けることは怠」らず、「ホトトギス」を愛読し、その模倣をしていた、と述べている。「まねごと」といい、「模倣」というのは、「まづい詩歌」と述べているのと同じく、三好独特の謙辞であるとともに、三好の詩に対する姿勢とも深く関わるところもあるのであるが、今は触れないことにする。

三好は、「千句二千句」も作ったという当時の俳句について、「幸ひにしてその頃のノートブックはいつのまにか紛失してしまつたので、今日では冷汗もののその片見の品は残つてゐない。」と述べている。その虚実の程は分からないが、おおよそ、その通りに受け取っておいてよいように思われる。三好の俳句が初めて活字になったのは、「青空」大正十五年十月号の次の二句である。

凛として蟷螂は葉をわたりけり
柿うるる夜はよもすがら水車

総題は「鵙の秋」で、この句の後に、無題の短歌六首、および、詩「私の猫」を並べて発表しているが、いかにも、三好らしい。

二

ここで、少し視点を変えて、三好達治が、小学校の高学年の時に、担任の若い先生によって、文学の世界に導かれるや、たちまちに、その世界にのめり込むように傾倒していったことの背景を確認しておきたい。

三好は、自伝的文章「魂の遍歴」（筑摩書房刊『現代倫理』第八巻、昭33・5）を、次のように始めている。

いつじぶんのことであつたか、学校へ上るよりはずつと以前、四五歳の頃に見た夕空の記憶があります。私の最も古い記憶の一つ、この齢となつてみると、もう人ごとのやうな感じもします。以前にはそれが妙に鮮明に、いつも眼底に浮かんできました。そのことがまたただ今となつては距離をおいて回想されます。

その時刻、風向きに従つて、丘の上の竹藪は、しなやかに反撓しながら、片なびきに靡いてゐました。その方向を、私はもの見の役目で、日暮れになると縁側に立つて、じつと一つとき眺めてゐました。さうして私の報告から、祖母は明日の天候を占ひました。そんな日課が、いく度くりかへされたことか、それはいつかう記憶にありません。

私の記憶には、たつた一回きりのやうに、影絵になつた竹藪の上に、くつきりと青く澄んだ、前方の地形と軒端にかぎられた一つの夕空が残つてゐます。宵の明星がただ一つ、そのある位置に、今もはつきりと輝いてゐます。

そんな年齢の私には、いづれ言葉の持合せはなかつたことだらうから、その眺望は、いつまでも沈黙のまま、そこ

にそのまま一つのものとして、美しく懸つてゐます。その印象は、だから、私だけのもの、といふ外はないものかも知れません。

長い引用となったが、さて、三好は、この段落を、次のように結んでいるのである。

私は、死の恐怖を覚えるより先に、自然の美しさを承認しました。これはただ今、さまざまな反省をくりかへしてみて、さう考へます。

そして、「学校へ上ると間もなく」、「最初の、第一回目の、死の恐怖に襲はれ」たこと、それを「秘密の恐怖」として、「人に告げてみよう」とは考えなかったこと、さらに、「死の恐怖」はその後も「くりかへし周期的に」少年の三好を悩ましたことなどが語られた後、「中学に上るじぶん」の次のような話に落ち着いてゆくのである。

私の育つた大阪の空にも、まだその頃は、夕暮れになると無数の鴉が東の空に帰つてゆくのが見られました。鍵になり棹になりする雁行の見られることもありました。そんなものをぼんやり眺めてゐるときに、私は既に、世に無用の、一隅の人間となりかかつてゐたのかも知れません。これはただ今反省してみて納得するところであります。

三好がここで語っていることの第一は、「死の恐怖を覚えるより先に、自然の美しさを承認」していた、ということである。三好にとって、「学校へ上ると間もなく」襲われた「死の恐怖」は、時を経て顧みた時、自己の性情、経歴の特異さを痛感させるものであったであろう。それを幼少年時の最大の事件としながらも、三好は、「死の恐怖を覚えるより先に、自然の美しさを承認」していたことを、自己の「魂の遍歴」のあり様として確認したのである。この時、三好が「承認」した「自然の美しさ」の、その美しさの傾向には、孤独感や死の静謐に通じるある感じが感じられないであろうか。語っていることの第二は、そのような形で自然に惹かれていた自分は、「既に、世に無用の、一隅の人間となりかかつてゐたのかも知れ」ない、ということである。このことは、半年後に、「ある魂の径路」(「知性」昭15・1)の中で、三好が、「詩歌に於て私の追及した興趣は一種『世外の感興』とでもいふべきもの」であった、と述べていること、また、あとで

見るように、俳句を「一種世外の文学」と認識していることと、直接に関わることである。そして、ここに語られている自然の美へのいち早い目覚めは、三好が、まず俳句という文学形式に引き寄せられたこととも、深く関わっているといえるのである。

さて、三好達治が、その詩歌の道に、偶然の力の作用も受けながら、俳句から入っていったことは先に見たとおりである。しかし、そこには、当然、必然性を見ることもできるのである。三好は、前出の「ある魂の径路」の中で、「私が一番最初に詩歌の類に関心を覚えたのは言葉がある制約――フォルムの中でうまく終結し完結してゐるといふことへの興味からであつた。」と述べている。そして、それは、「秩序への愛だとか、形式美への何だとか」によるというよりも、「地口や駄洒落や語呂合せやの、その場限りのあの言葉の遊戯の方に、いつそう多くの共通性」を持っており、「「言葉がウマク運んでゐる」といふことへの興味」で、「内容などは全く問題でなかつたといつても宜しい。」というのである。ここに述べられている、「詩歌への最初の興味」が「「言葉がウマク運んでゐる」ことへの興味」であったという事実は、三好が、何を表現するかということからではなく、いかに表現するかということへの関心から詩歌の道に近づいていったことを示しており、そのことは、また、形式というものへの関心と、まったく、無関係ではあり得ない。このことは、三好が最初に近付いた詩歌が、五・七・五という形式をそなえた川柳、俳句であったことの必然性を十分に納得させてくれるであろう。

三

ところで、陸軍士官学校を中退した三好は、第三高等学校に入学するが、三高在学中に、以前とは「別な意識と情熱とで文学を愛し、詩歌を愛するやうにな」り、「二年間ばかりは夢中で、短歌を作りつづけ」（前出「詩歌の思出」）、ついで、室生

犀生と萩原朔太郎に魅惑され、丸山薫を知ることにより、詩作へと転じることになるのであるが、三好の心から、そのまま、俳句が消えてしまうということはなかった、といってよい。そのことは、先に見た「鵙の秋」の発表形態――俳句・短歌・詩の並列的発表――を見ても納得できるであろう。昭和五年に刊行された三好の最初の詩集『測量船』は、モダニズムの詩の氾濫する中で、当代における抒情詩の可能性を追及したと評価されているものであるが、その方法の一つは、古典的な詩歌との融合の可能性の追及である。ヴェルレーヌ・ボードレール・ランボオ・ヴァレリーなどの影を残した暗鬱な散文詩や軽快なテンポの斬新な作品群の一方に、文語自由詩や短歌形式の作品もある。そして、次のような作品が。

秋夜弄筆（「亜」第三十五号、昭和2・12）

日かず経て呼子鳥啼かずなりしを、それかともききあやしみて外のもに出づれば、音に澄みて鳴けるは遠き蟋蟀なりけり。柿の実したたかに石に落ち、空を仰ぐに風早く雲飛んで月もまた飛ぶこと早し。野に粛殺の兆ありて客心を痛ましめ、夜頃を宿のほとりに、我は秋蚕（しうさん）の匂ひあるなかをさまよひぬ。また室に帰りて怠りて弓臥するに、時はなほ衣手のうすきを喞つに早けれども

ひとときは風ちかきひぢ枕

また時ありて山雨のわづかにたばしり去るを前庭のひろきに知りぬ。

楠天の葉うらも白き月夜かな

落葉やんで（「信天翁」第二号、昭和3・2）

雌鶏が土を掻く、土を掻いては一歩すざつて、ちよつと小頸を傾ける。時雨模様に曇つた空へ、雄鶏が叫びをあげる。下女は庭の落葉を掻き集めて、白いエプロンの、よく働く下女だ、それに火を放つ、私の部屋は、廊下の前に藤棚があつて、昼も薄暗い。ときどきその落葉が座布団の下に入つてゐた。一日、その藤棚がすつかり黄葉を撒いてしまつて、濶然と空を透かしてゐた。

飴売りや風吹く秋の女竹

やまふ人の今日鋏する石榴かな

病を養つて伊豆に客なる梶井基次郎君より返書あり、石榴の句は鋏するのところ、剪定の意なりや収穫の意なりや、弁じ難しとお咎め蒙つた。重ねて、

一つのみ時雨に赤き石榴かな

そして私も、自らの微恙の篤からんことを怖れて、あわただしく故郷へ帰つた。そこにも同じ果実が熟していた。

海の藍石榴日に日に割るるのみ

冬浅き軍鶏のけづめのよごれかな

二三度母のお小言を聞いて、そして全く冬になつた。或は家居し、或は海辺をさ迷ひながら。

冬といふ壁にしづもる棕櫚の影

冬といふ日向に鶏の坐りけり

落葉やんで鶏の眼に海うつるらし

阪本越郎は、『日本の詩歌　22　三好達治』の「鑑賞」で、「秋夜弄筆」について、「達治が少年時代から手なれた俳句を生かした新俳文とでもいうべきものである。」「作者は当時の「新散文詩」に対抗し、このような擬古文的な散文を試みた。」「詩歌の伝統を新しい眼で見直して、その根底をなす抒情精神から真の日本の詩を建設しようとしたのであった。」と説明している。また、「秋夜弄筆」「落葉やんで」に含まれる達治の俳句は、「ホトトギス派の写生俳句の系統を踏んだ明るい鮮烈なものである。」「達治の俳句に色彩感覚のすぐれたものがあるのは、その詩と同様である。」と評している。ともに、納得できる指摘である。この試みを二つの文体でしてみせたところに、三好の実験者としての面目がうかがえる。『測量船』に収録したのはこの二篇だけであるが、三好は、他にも数篇の「新俳文」を書いている。

三好が、このような試みを思いついた背景には、蒲原有明が詩集『春鳥集』(明治38・7)の序に記した象徴詩論の中で、わが国の古典文学における象徴的なものとして、清少納言の枕草子の一節とともに、芭蕉の句や、近世の俳文をあげていることも、一つのヒントになっているかもしれないが、直接の刺激としては、詩誌「亜」と、その同人安西冬衛、滝口武

士の存在が考えられる。「亜」は、北川冬彦らと呼応して短詩運動をおし進めた、前衛的な詩誌として知られるが、安西、滝口ともに本格的な作句力の持ち主であり、誌上に時折、その句作を掲載している。そのことは、三好を「亜」に近づける一契機となったであろうし、次に掲げる安西の一篇などは、同じく、安西の「臘月ノ記」（「亜」26号・大正15・12）などと共に、三好の「新俳文」の着想に、密接に関わっていると見てよいであろう。

春の鱈（「亜」28号、昭和2・2）

、、日私は春雷亭で、鱈の羹を太か喫した。味は頗る脆美であつた。尤も私は性、魚介を嗜まない。だから満喫したといつても、実は遠くからその庖丁を望んだに止んだ。断つて置くが春雷亭とは、仮に私が命名した、私の俳友の新居であつて、かの市井の庠舎、或は狭斜の類ではない。

私は私の日記「桜の落葉」を鈔出して、又私が仮に春雷亭と命名したその所以を書き記さう。以下が即ちそれである。

――座右の書架にはエセーニンの詩集に隣り、桜井ちか子の割烹の本なぞ見え、新居の気分掬すべし。時に殷殷と轟き過ぐるものあり。春雷かと問へば、否電車と云ふ。云云。

因にいふ。私の俳友とは、詩集「杏」の著者、加藤郁哉のことである。

羹に鱈の身白き二月かな

安西冬衛が、日録風の形式を取り、誌上の扱いもそのようであるのに対し、三好の「秋夜弄筆」は、凝りに凝った擬古文風のスタイルに従っており、「落葉やんで」は、日常雑記風、あるいは随想風に記されているが、もっとも相違するところは、三好が、あくまで、この二篇を詩として待遇しているところにある。

この「新俳文」の試み以外にも、三好は、俳句を詩の中に持ちこんでいる。三好が昭和二年十二月、「亜」35号に発表した「しゅうしょうとまん」（囁き）四篇の中の一篇「池」がそれである。

鯉――いくたびか鮒たむろする今朝の秋

鮒――二三枚うろこ落して鯉の秋

「しゅうしょうとまん」は、岸田国士訳ジュール・ルナールの『葡萄畑の葡萄作り』に学んだもので、動物や植物や鉱物や、また、さまざまな器物たちが賑やかに会話をかわす世界である。賑やかにといったが、ルナールの作品の多くは、お互いに批判しあい、けなしあう、自己主張の強い、いわば、人間臭い、俗物が幅をきかせる世界である。それにくらべると、三好の場合は、皮肉をきかせたものも多いが、全体として上品な諧謔の世界が形成されている。「池」は、見るとおり、鯉と鮒とがお互いに、相手を俳句を使って嘲笑しているのであるが、嫌味はない。ついでにいっておくと、「しゅうしょうとまん」の一篇「川」は次のようなものである。

鶺鴒――川の石のみんなまるいのは、私の尾でたたいたためです。

河鹿――いいえ、私がとおくからころがしてきたためです。
石――俺は昔からまるかつたんだ。

ところで、三好の第二詩集『南窗集』（昭和7・8）はすべて四行詩の集であるが、その一篇「鶺鴒」は、

黄葉して　日に日に山が明るくなる
谿川はそれだけ緑りを押し流す
白いひと組　黄色いひと組　鶺鴒が私に告げる
「この川の石がみんなまるいのは　私の尻尾で敲いたからよ」

というものである。ここから、「しゅうしょうとまん」が、三好の『南窗集』をはじめとする四行詩への、一つのきっかけとなっていることが推定できる。この三好の「しゅうしょうとまん」についても、三好に先立って、安西冬衛の、昭和二年二月の「亜」28号の次の作品があることを、記しておきたい。

春

鴨　春は私(あたし)から始まるのよ。ホラ「鴨の外には誰も春を語るものはない。おお、まあ、なんといふ鴨の群だ」ってチエホフってひとが言っているぢゃあないの。

猫　フン、「どこからか月さしてゐる猫の恋」ってネ。

壁に掛けた地図　ポカポカしてくると、そこら中が痒くって―

吊洋燈　日が永いなあ。

『南窗集』の中に、もう一篇、興味深いものがある。「馬」と題された一篇である。

茶の丘や
桔槔（はねつるべ）
馬
梅の花

これは、五・七・五という俳句の形式を備えているが、三好は、詩として待遇しているのである。吉田精一は、『日本近代詩鑑賞　昭和篇』（新潮文庫、昭和29・2）において、三好の四行詩の特色の一つを、「俳諧にあるやうな自然のきりとり方と、伝統的な情緒とをもつてゐる」ことと指摘し、「馬」を例として示して、「全く俳句のリズムを踏んで、しかし俳句のもつ暗示と象徴の世界を去り、印象派風の明瞭な感覚と色彩を生かした詩」と鑑賞している。この鑑賞は、三好の俳句論はあとで見るが、三好が、俳句の詩としての特質を、「暗示性」としていることとも重なるのである。

ここで、『測量船』にもどって、三好の俳句と詩との関わりを、もう一つ、見ておきたい。それは、俳句の配合という

手法の、詩における採用である。

村（「青空」第三巻第六号、昭和2・6）

鹿は角に麻縄をしばられて、暗い物置小屋にいれられてゐた。何も見えないところで、その青い眼はすみ、きちんと風雅に坐わつてゐた。芋が一つころがつてゐた。

そとでは桜の花が散り、山の方から、ひとすぢそれを自転車がしいていつた。
背中を見せて、少女は藪を眺めてゐた。羽織の肩に、黒いリボンをとめて。

吉田精一は、前出の『日本近代詩鑑賞』の中で、この詩について、当時のモダニズム詩にくらべて、「これは、俳句の世界にあるやうな視覚的な叙景になつてゐる。この時代の背景に置いて見ると、いかにこれが古典的な感じをもつてゐるかが分る。」と指摘している。この詩は、静かな山村の片隅の情景をえがいたものである。この詩の前半と後半とのそれぞれの情景は、一見何の関わりもなさそうであるが、ある種の不安の情緒、あるいは不吉な感情によって、一つに結ばれているのである。初出の際には一続きの作品であったものを、二連に分けたところに、取合わせ（配合）の手法への意識を見てとることができる。前半の「風雅」という言葉が、この詩の、古典的情趣を強めている。

村（「詩と詩論」昭和4・12、原題「林」）

恐怖に澄んだ、その眼をぱつちりと見ひらいたまま、もう鹿は死んでゐた。無口な、理屈ぽい青年のやうな顔をして、木挽小屋の軒で、夕暮の糖雨に霑れてゐた。（その鹿を犬が嚙み殺したのだ。）藍を含むだ淡墨いろの毛なみの、大腿骨のあたりの傷が、椿の花よりも紅い。ステッキのやうな脚をのばして、尻のあたりのぽつと白い毛が水を含むで、はぢらつてゐた。

どこからか、葱の香りがひとすぢ流れてゐた。

三椏（みつまた）の花が咲き、小屋の水車が大きく廻つてゐた。

この詩においては、鹿はすでに犬に嚙み殺されていて、悲劇性は強いが、「風雅」を中心に据えた詩情は共通している。死んでいる鹿に、「葱の香り」や「三椏」の淡い花を配しているところに、それはうかがわれる。

しかし、「峠」（「詩神」昭和5・5）の次の一節、

……既に旅の日数は重なつてゐた。私は旅情に病の如き悲哀を感じてゐた。しかし私にあつて今日旅を行く心は、ただ左右の風物に身を托して行く行く季節を謳つた古人の心でなければならない。……

を最後に、三好における、詩と俳句との直接的な関係は姿を消している、と見てよい。以上に引用した詩は、すべて『測量船』の前半に収められているものである。三好は、晩年に句作を再開するが、しかし、その間、三好が俳句と、まったく疎遠になっていたわけではない。後で見ることになるが、三好は、昭和十年から十二年にかけて幾篇もの俳句論を書き、また、他に、俳句の鑑賞も多くものしているのである。

四

ところで、三好における詩と俳句との関連を、諸家の見解を参照しながら、あらためて考えてみたい。

しばしば引用することになるが、吉田精一は、この問題について、前掲書の中で、三好の詩は、彼が影響を受けたフランシス・ジャムの詩のような「はばがない代りに、その冗長と散漫がなく、遥かに簡潔で、澄明である。」として、そのよって来たるところを、三好の俳句修行に見ている。すなわち、「伝統的な俳句の世界、俳句の精神が、彼の自然を見る眼と表現の仕方を凝縮したのである。俳境を生かした詩のスタイルに於て、彼は自然のレアリテを追及し、把握したのであつたともいえよう。」というのである。

畠中哲夫は、『詩人　三好達治　越前三国のころ』において、「俳句は人と言葉をストイックにする。三好達治の心理的に抑制の効いた作品は、俳句から学んだものだ。／三好達治が萩原朔太郎に思想的な共感を覚えながら、室生犀星に惹かれていったのは、犀星には言葉を厳しく抑える俳句的な節度感覚があったからと思う。」と考えている。

石川淳は、三好の追悼文の中で、室生犀星と三好との俳句との関わり方を比較して、「三好における俳人は、室生さんの場合とは事情がちがうようである。詩人の犀星は、俳人犀星を胸裡の『離れ屋』において、詩境一般にみだりに踏み越せないような、庭づくりの法をこころえていたが、三好はこの有季十七字形の『離れ屋』に踏みこんで、そこに根をすえた結果になっている。」といい、「三好がそこに見つけたのは、あたえられた約束に於て言葉をみがく、自然と生活との関係の中に機微をさぐってゆく、いかに生きるかという生活の仕方にかかわるもののようであった。」と判定している。吉田精一や畠中哲夫の見解が、主として、詩法の範囲にとどまっているのに対して、石川淳は、詩と俳句との関わりではなく、三好における俳句の意味についてであるが、三好の「生活の仕方」にまで踏みこんで、俳句の影響を見ようとしてい

るのである。

ところで、三好自身は、どういっているであろうか。

三好は、河盛好蔵との対談で、「三好君は俳句の方から始められたのですか。」と問われて、「いや、それは俳句をやったと言う事と、詩を始めたということとは、時間的には、そういう順序になっています。けれども質の上で、その心持が連続していたかどうか疑問だと思います。」「その二つの間はつながらないように思いますがね。」と答えている。

この小文のはじめに取り上げた、「詩歌の思出」の中で、少年時代に始めた俳句について、三好が、「今日まづい詩歌の類を、なほこりず今に作りつづけてゐるのも、その頃のその出発の引続きであるといつていへなくもなささうである。」といっている一方、詩作に入ったことについて、以前とは「別な意識と情熱とで文学を愛し、詩歌を愛するやう」になった、と述べているのは、見た通りである。結局、俳句から詩歌の道に入り、その引続きとして今日の詩もあるが、俳句から詩に移った時、「その心持が連続していた」とはいいがたい、しかし、その後も、俳句は詩の一形態として、三好の心の一隅にありつづけた、というのが妥当な見方であろう。しかし、三好が、「放下箸」(「文学界」昭和29・5〜7)の中で、「年少の頃から人真似に嗜んだ俳諧趣味は彩光のよい外界、繊細な自然美の一つ一つを私に示した。」と述べていることも、見過ごすことはできない。これは、三好の、詩人としての全生涯に関わることである。

五

最後に、三好達治の俳句観を、三好の「詩歌と科学」(初出未詳)、「俳句の抒情性」(「俳句研究」昭和12・9)、「現代俳句の詩的基礎」(「俳句研究」昭和10・2)の三論文を参考に、簡潔にまとめてみたい。

三好はまず、「詩歌の基礎」について、詩歌と事実の関係を述べる。「詩歌は事実を直叙するものであり、「詩歌の魅

力は、総て例外なく詩歌の裡に内在する現実性にかかつてゐる」というのである。なぜなら、「詩歌として普遍性のあるものは、人間心理の現実性に立脚したものである」からである。そこで、「詩歌は事実を追究するものである」ということになる。では、どのように「事実を追究」したらよいのか、三好は、画家中川一政の、「見えないから描けない。見える時をのがしてはいけない」という言葉を思い出して考える。「見える時の、見えるもの」それが「現実（事実）」あるいは「現実の現実」とでもいうべきものであると。そして、「現実の現実」は「現実に何かの加はつた時」あるいは「現実から何かの夾雑物の取除かれた時」に現れるのであると。その、「現実の現実」が現れた時、「ある正確なるもの」「必ず繰返されるある同質のもの」がそこにあることが感じられる、と三好がいうのは、実作者としての体験を踏まえてのことであろう。その時に、「ある一種美的な調和感」が感じられることを、三好は、今度は数学者ポアンカレの言葉を通して確認する。つまり、詩歌は、その「現実の現実」を「最も的確」な言葉に「翻し記録」するものである。つまり、詩歌は、「一つの確固とした認識の記録」「一つの秩序、調和的審美感覚の写象」「事実を事実として述べた平明直叙の記録」である。そこに形成された詩歌の表現は、「読者の胸裡に、それの出発である調和感覚を喚起し再現する」作用がある。言葉をかえていえば、詩歌は、「言語を以て、人間の精神機構そのものを計量するところの認識——云はば一箇の自己認識で」ある、というのが、この項の結論である。

では、三好は、俳句の本質をどのように、考えているだろうか。三好は、まず、「詩である以上、俳句もやはり抒情詩である。」と断定する。そして、和歌と比較対照して、「和歌は三十一文字の形式により、人間感情の最も自然な流露を歌うのに適している」ところの「自然的抒情詩」であり、「俳句は、一種人生観的な、反省的な——即ち思想と態度とを以て歌う抒情詩」である、と見る。「俳句は、内省的・思想的・一種世外の文学・解脱の文学・花鳥風月の自然観賞」をもっぱらとし、「所謂寂び撓りのやや微温的な程度に於て」「人生否定の観念」を樹立するものである、ということになる。

また、三好は、自由律の句については、「言葉の詩的魅力——主として形式から来る韻律的魅力を全く欠如した、ただ

単に、極端に短い散文、時には、ただ作者にとつてしか散文としての意味をもなさないところの、ナンセンスな言語の羅列」に過ぎない、として全否定している。三好は、自由律の句を論じるにあたって、「不定型句」「不定型作家」といい、「俳」の字をまったく使っていないのである。

「季題」については、「俳句に季題の約束があるのは」「詩歌の暗示力といふ、自らの驥足を擅まにのべんがための、単なる約束と云はんよりは寧ろ必然の手法とも称すべき、重要不可欠の 生命線のやうに見うけられるではありませんか。」としている。

そのような三好は、当代の俳壇をどのように見ていたかというと、「嘱目の 小景を写しとる 簡純素朴な写象の巧みさ」に当代の俳人の特質を見るが、それがために、「時にまた一律単調の弊に陥る憂い」がある、と批判する。すなわち、「写生道にかたまりすぎ、簡樸の趣味に傾倒して、多く退屈に堕し、俳道本来の洒脱な趣に乏しく、また、絢爛富麗な巧技に乏しい」というのである。そのような三好の、意中の俳人は、といえば、高浜虚子を別格として、どうやら、飯田蛇笏あたりに落ち着きそうである。